

詩篇 86 篇

「アーニー・ヴェエヴヨーン・アーニー」の瞑想

אֲנִי וְאֶבְיוֹן עָנִי

1 節 【主】よ。あなたの耳を傾けて、私に答えてください。私は悩み、そして貧しいのです。

アーニー ヴェエヴヨーン アーニー キー

אֲנִי וְאֶבְיוֹן עָנִי כִּי

私は 貧しい 貧しい、悩む なぜなら

アーニー エヴヨーン

עָנִי と אֶבְיוֹן に注目します。

- (1) 「アイン」 (ע) 目、「ヌーン」 (נ) 決まり、規定、「ヨード」 (י) 神の膨大なデータが一人の人の中に凝縮したイエシュア
「アーニー」 (עָנִי) にはイエシュアの決まり、規定を見る目、つまりリビング トローラーであるイエシュアを見つめるという意味があります。初代教会では、イエシュアを「ハットローラー」 (הַתּוֹרָה) と呼んでいました。
- (2) 「アーレフ」 (א) 神聖、力、「ベート」 (ב) 家、国家、「ヨード」 (י) イエシュア 「ヴァーヴ」 (ו) 天から降りてくる一筋の光、「ヌーン」 (נ) 決まり
「エヴヨーン」 (אֶבְיוֹן) には、神の家 (神の国)、それは天から地に降りてくる神の力であるリビング トローラー、イエシュアという意味があります。

「私は悩み、貧しいのです」原語では「私は貧しく、さらに貧しい (極貧)」というダビデの告白は「私は真にイエシュアを見ています」という信仰告白です。イエシュア以外には何もない、「自分に死ぬ」という状態です。この世に対する「殉教」とも言えると思います。「自分に死ぬ」ということは自分の感情を押し殺して生きる、ということではありません。人間は「喜怒哀楽」という感情で自分をコントロールしなければ精神を病んでしまいます。「自分に死ぬ」ということは、ギリシャ的な人間中心の思いを殺して、ヘブル人になる、つまり神中心に生きるということです。ギリシャ的な人間中心に死ぬ、です。その状態を

聖書では「貧しい」と表現しています。

マタイの福音書 5 章 2 節

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」

ダビデの祈りはこの、有名な聖句につながる祈りと言えます。自分中心の自分に死んで、心、つまり霊の貧しい者となり、神のことばであるイエシュアだけを見、そして「神の国」を見るということです。自分の力ではできません。「主よ。あなたの耳を傾けて、私に答えてください。」と懇願し続けなければ貧しい者にはなれないと、ダビデは祈りを通して私たちに教えています。

詩篇 24 篇 3、4 節

3 だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。

4 手がきよく、心がきよらかな者、**そのたましいをむなしいことに向けず**、欺き誓わなかった人。

詩篇 25 篇 1 節

【主】よ。**私のたましいは、あなたを仰いでいます。**

魂をむなしいことに [人間中心的なことに] 向けず、ひたすら主だけを仰ぐ信仰の姿勢が「アーニー・ヴェエヴヨーン・アーニー」(עֲנִי וְאֶבְיֹן אֲנִי) です。雄々しい信仰告白であり、決して弱い人間の感情の吐露ではないです。

「貧しい者」となることの難しさを以下の聖書箇所から考察してみます。

申命記 21 章 18 - 21 節

18 かたくなで、逆らう子がおり、父の言うことも、母の言うことも聞かず、父母に懲らしめられても、父母に従わないときは、

19 その父と母は、彼を捕らえ、町の門にいる町の長老たちのところへその子を連れて行き、

20 町の長老たちに、「私たちのこの息子は、かたくなで、逆らいます。私たちの言うことを聞きません。放蕩して、大酒飲みです」と言いなさい。

21 町の人々はみな、彼を石で打ちなさい。**彼は死ななければならない。** **あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。** **イスラエルがみな、聞いて恐れるために。**

かたくなで、神にさからう者、懲らしめられても従わない者、そのような者の悪のパン

種は死につながります。ここでの「子ども」とは「悪のパン種」を霊の内に宿している「自分自身」とも言えます。たましいをむなしいことにむけず、主だけを仰ぎ見るということへの厳しさをこの聖書箇所から感じ取ることができます。

放蕩、大酒のみ、という表現は神の前では徹底的に惨めな姿です。この姿はわたし自身であると知ること、そういう自分を認めること、自分自身の絶望的なまでの窮乏を自覚し、神において、ただ神においてのみ、その窮乏が満たされることを心から確信している者の告白が、「アーニー・ヴェエヴヨーン・アーニー」(עָנִי וְאֶבְיֹן אֲנִי)なのではないでしょうか。

詩篇 86 篇 2 節

2 私のたましいを守ってください。私は神を恐れる者です。わが神よ。どうかあなたに信頼するあなたのしもべを救ってください。

「シャームラー・ナフシー」(שָׁמְרָה נַפְשִׁי) 魂を守って、あるいは、見張って欲しい、主に向かってのみ願うことのできる祈りです。「貧しい者」となるための懇願です。

詩篇 86 篇 3、4 節

3 主よ。私をあわれんでください。私は一日中あなたに呼ばわっていますから。

4 あなたのしもべのたましいを喜ばせてください。主よ。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

「主を呼ばわる」とは神に助けを求め、すがるように単に「主よ、主よ」と叫ぶことではありません。神のマスタープランの中で、信仰者は様々な時代に置かれます。ルターの時代、ホロコーストの時代など。また日本では、江戸時代と第二次世界大戦中に多くのキリスト者が迫害を受けました。このように歴史は、様々な悲惨な状況を物語ってきました。しかし、目に見える状況がどのようなものであっても「アーニー・ヴェエヴヨーン・アーニー」(עָנִי וְאֶבְיֹן אֲנִי)と告白する時、地に降りてくる神の力に包まれるということを知ることができると思います。「主を呼ばわる」ということは、呼ばわる「カーラー」(קָרָא)にある「アーレフ」(א)の「神」、「レーシュ」(ר)の「思考」、そして「コフ」(ק)の「希望」、すなわち「神の思考による希望」を抱くことを意味します。つまり、一日中、神に与えられる「希望」を言葉にしているということです。そうすることによって魂に喜びが来ると信じます。どのような状況にあっても。

詩篇 86 篇 11 節

【主】よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。

どのような時代にあっても、神に魂を守ってもらうためのただ一つの祈りがこの聖句だと思います。「ヤヘード・レヴァーヴィー」(יְהוָה לְבָבִי)、心を「一つにする、一緒になる、結束する、結び合わされる」とは、イエシュアと結び合わされることを求める祈りです。イエシュアと結び合わされるということは、具体的に言うと神の声である「創世記から黙示録」まで、的を射た理解を積み重ねて行くということです。それが「主と呼ばわる」ということです。

詩篇 86 篇 14 節

神よ。高ぶる者どもは私に逆らって立ち、横暴な者の群れは私のいのちを求めます。彼らは、あなたを自分の前に置いていません。

ここでの「わたし」はダビデですが、ダビデはイエシュアの型なので、「イエシュアに逆らって立つ高ぶる者」「イエシュアの命(「ネフェシュ」נֶפֶשׁ)を求める横暴な者」と理解してもいいと思います。真理の道を歩みたいと願う者の霊、命を破壊しようとする者たちです。「貧しい」とはまた、このような状況を指していると言えます。ギリシャ語の貧しい「プトーチス」は、「ちぢこまる、うずくまる」という意味のプトーチンから派生し、単に貧乏な生活、収支を償わせようとする労働者のたたかいばかりでなく、文字通りの無一物、ほんとうに餓死する危険が内在しているなさけない貧乏を言うのだそうです。霊的な無一物、霊的に餓死する寸前の窮乏が常に目の前にある、私たちはそういう存在なのではないでしょうか。気が付いたら「イエシュアに逆らって立つ高ぶる者」は自分、という状況に堕ちていくなさけない自分を常に自覚したいと思います。心から「主よ、あわれんでください」と祈るのみです。

詩篇 86 篇 13 節

それは、あなたの恵みが私に対して大きく、あなたが私のたましいを、よみの深みから救い出してくださったからです。

主は「ヘセド」(חֶסֶד)、恵みです。

「ヘット」(ח) 霊的な生活の歩み 永遠の命

「サーメフ」(ס) 60倍の祝福を指す状態

「ダーレット」(ד) 寄り頼む 没頭する

小泉八雲の言葉に、「私たちは独立自尊とか自立をよく口にする。だが人は他人に頼らずに生きることはできない。おぼれかけた人間が自分の髪を引っ張っても自分を自ら引き上げることはできない。よき相互依存あってこそ、よき自立も可能なのだ。」というのがあります。神様は私たちが真理の道を歩むことを望んでいます。状況に流されておぼれて

しまわないために、神様とのよき相互依存が必要です。「ヘセド」の心髓を知りたいと主に願い、そこに没頭して生きる以外に救いはありません。主の「ヘセド」に寄り頼んで生きていかなければおぼれてしまいます。

詩篇 86 篇 7 節

私は苦難の日にあなたを呼び求めます。あなたが答えてくださるからです。

この聖句も「神様、助けてください！」ではありません。「カーラー」(קָרָא)は「神の思考による希望」、ダビデは常にその中に居ました。小泉八雲の言う「よき自立」です。

詩篇 86 篇 5 節

主よ。まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。

「あなたを呼び求めるすべての者」とは、神の思考による希望、神の「ヘセド」(חֶסֶד)の真髓を知っている者たちです。ピリピ人への手紙 3 章 1 2 節「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」このような者たちです。(「捕える」「カタランバノー」καταλαμβάνω)には(理解する わかる)という意味もあります。ピリピ人への手紙 3 章 1 2 節は以下の箇所とリンクします。

詩篇 86 篇 1 6 節

私に御顔を向け、私をあわれんでください。あなたのしもべに御力を与え、あなたのはしための子をお救いください。

「救う」(「ヤーシャ」יָשָׁא)には、「勝利をもたらす」という意味もあります。主が御顔を向けてくださるとは、主が捕えて下さるということではないでしょうか。

詩篇 86 篇 1 7 節

私に、いつくしみのしるしを行ってください。そうすれば、私を憎む者らは見て、恥を受けるでしょう。まことに【主】よ。あなたは私を助け、私を慰めてくださいます。

「いつくしみのしるし」(「オート」אוֹת)には、「地に降りて来た神の力の完成」という意味があります。すでに得たのでもなく、完全にされた者ではないけれど「神の完成」の中に入って行きたいという希求です。これこそが私たちの助けであり慰めです。それはどの

ような時代にあっても、押し流されることも消えることもありません。

【主】よ。あなたの耳を傾けて、
私に答えてください。
私は悩み、そして貧しいのです。

この聖句と

血と汗に
ワイシャツ濡れている無援
一人への愛 うつくしくする

岸上大作の短歌が重なってしまいます。彼は60年安保闘争に参加し革命と恋の青春をナイーブな感性で作品にし、21歳の若さで自ら命を絶ちました。神への愛を全うする「殉教」のプロセスは「血と汗に ワイシャツ濡れている無援」という表現がぴったりです。人間中心が氾濫している世にあって、私たちは無援です。この世に信仰者が求めるべきものは何一つありません。神の国を見続けた、「御国をこの地に來たせたまえ」と祈る毎日。私たちが所有しているものは、「神のみことば」と「主の祈り」だけなのだ信じます。ダビデの祈りは、無援の中で神おひとりへの愛を美しくしている祈りと感じました。

主よ、私を貧しいものとしてください、と願ひ求めます。

西川 徳子